

ロバート・フィンチの「場所の感覚」

村 上 清 敏

序

この春ふみくら書房から出版されたスコット・スロヴィック編集のアメリカン・ネイチャー・ライティングのアンソロジー *Worldly Words* の序文で、スロヴィックはネイチャー・ライティングの元祖としてのソローの重要性を語りつつ、次のように述べて、「地の日常的な現象を重視」しようとする「場所の感覚」がアメリカのネイチャー・ライティングに頻出する主要な問題の一つであると指摘している。

... Thoreau anticipated many of the central ideas and issues that are routinely observed in American nature writing of the past fifty years: for instance, concern about the effect of industry and technology on the natural world and human society; fascination with the relationship between the human mind and nonhuman nature; emphasis on local, everyday phenomena rather than exotic, extraordinary things and events; and appreciation of simplicity in nature and human life.¹

さらにスロヴィックは、生物多様性の喪失、熱帯雨林の破壊、汚染、地球の温暖化、人口増加といった環境問題が地球規模の問題となっている現実をふまえながら、そうした問題の解決にはそれぞれが住んでいる場所を大切にしようとする「場所の感覚」こそが重要だと訴える。

スロヴィックがこうした主張をするとき、専らその念頭にあるのはケンタッキー在住の作家ウェンデル・ベリーである。「問われるべき問題は、いかにして地球を気遣うかではなく、掛け替えのない地球上の多くの人類及び自然の隣人のそれぞれをいかに気遣うかということだ」と述べたウェンデル・ベリーであるが、ケープコッド在住でケープコッドを舞台にしたエッセイ集をこれまで4冊出版し、『ケープコッド読本』²なるアンソロジーまで編んでいるもう一人の作家、ロバート・フィンチ(1943—)を語る際にも「場所の感覚」は忘れてはならない重要なキー・ワードである。

これからロバート・フィンチにおける「場所の感覚」を論ずるに当たり、(1)フィンチにとってケープコッドがいかなる場所であり、(2)その場所で「テリトリーの感覚」を獲得するには何が必要であり、(3)それがフィンチの「人間の感覚」、すなわち人間観といかに表裏一体のものであるか、以上三点に絞って論を進めてゆきたいと思う。

(1) 「未知なる生き物」としてのケープコッド

まず、『ケープコッドの潮風』（以下『潮風』と略す）序文の冒頭で指摘されているように、ケープコッドは「北アメリカの沿岸のどこよりも開発が進み、人が住み、訪れ、研究の対象としてきた」という歴史的事実がある。すなわち、メイフラワー号の102人の乗客は1620年12月16日にプリマスに到着し、18日にそこに上陸したが、それに先立つ11月9日にはオランダ出航以来2カ月ぶりに初めて陸地、つまりケープコッドを目にし、現在のプロヴィンスタウンの沖合いに停泊して、「メイフラワー誓約書」を作成している。ピルグリム・ファーザーたちの最初の上陸地としての栄誉はプリマスに奪われている観があるものの、ケープコッドとピルグリム・ファーザーとはアメリカ人の意識の中で深く結びついているのである。

以後370年の間にケープコッドは大変な変貌を遂げている。19世紀中葉にこの地を訪れたソーローは「この地はやがて真の海浜探訪を求めるニュー・イングランド人にとってのリゾート地となるだろう」と既に予言していたが、その予言が的中して、1851年に鉄道が敷かれると、避暑客が集まり始め、海浜の開発が始まる。第一次大戦後に初めての舗装道路が建設されると、こうした流れにさらに拍車がかかり、第二次大戦後のハイウエーの建設で、「素敵な海浜リゾート地」（『潮風』「鯨のように」）としてのケープコッドの地位は不動のものとなる。1940年から1990年の50年間でケープコッドの人口は3万人から17万5千人に、夏の人口は50万人以上に膨れ上がっている。さらに、1970年から1990年の間に、毎年平均5000エーカーの土地（ほぼプロヴィンスタウンに匹敵する面積）が居住用及び商業用に開発されているという（『海浜公園ハンドブック』「ケープの変貌」）。

では、フィンチはケープコッドという地をどのように見ているか。それは、例えば、『潮風』序文の結びに端的に現れている。

Greatly altered in appearance — in places to the point of unrecognizability — Cape Cod nonetheless remains as fundamental, challenging and unexhausted a departure point for discovery and self-discovery as it ever was. After more than three and a half centuries of occupation by Western man, the real Cape still eludes us, offering and withdrawing its mysteries with the tides, saying follow me, know me, live with me.³

すなわち、上述したピルグリム・ファーザー以来の開発の歴史にも拘わらず、フィンチは「それでもケープコッドは、依然として、発見と自己発見のための重要な挑戦的な無尽蔵な出発点」であり、「真のケープは今なお僕たちから身をかわし、潮の干満と共にその神秘を見え隠れさせながら、後に続け、知れ、共に生きろと言っている」という。370年以上にわたって開発・搾取され続けてきた「場所」であるケープコッドにおける自然破壊を嘆く代わりに、それを「自己発見のための未知なる生き物」と定義しているのであるが、それは一体どういうことか。

フィンチがケープコッドを「生き物」と定義する理由の一つはその地理的・地質学的背景にある。通常、ケープコッドはその独特な形状から「腕」としてイメージされるが、フィンチの場合、その「腕」は決して固定されず、いわば伸縮自在となっている（『丸ごとケープコッド』『ケープコッドの特徴』）。ところが、事実はどうかと言えば、『潮風』『絶壁のカツオドリ』の記述に従えば、ケープコッドの外海は一年に3.3 フィートづつ海によって浸食されているのである。「伸縮自在」というよりは、脆弱な、消滅の危険をはらんだ「腕」であることはフィンチ自身も知っていて、それは、例えば、次のような指摘に現れている。このままの率で浸食が進めば、 Cotton・マザーの予言が的中して、ケープコッドは5～6千年のうちには海中に没するであろうというのである。

Oceanographers estimate that for every five acres of shoreline lost to erosion, only two are replaced with new land in the form of barrier beaches or sand hooks. There is little doubt that the Cape's ultimate fate is to return to the sea that spawned and shaped it. At current rates of sea-level rise, Cape Cod has at best only another five to six thousand years before the Puritan preacher Cotton Mather's prediction comes true, and "shoals of codfish be seen swimming on its highest hills."⁴

さらには、こうした自然の脅威にさらされた「場所」としてのケープコッドの描写は、激しい嵐による海岸線や砂丘の破壊にも見て取ることができる。例えば、1978年2月6日から7日にかけての「今世紀最大の嵐」は砂丘の90パーセントを破壊し、ヘンリー・ベストンの「さいはての地の家」を含む浜小屋の大半を押し流し、浜辺の更衣室と駐車場を壊滅させてしまった（『海浜公園ハンドブック』『海中の巨大な手』）。

このようにケープコッドという「場所」は絶えざる自然の脅威にさらされ、刻一刻その姿を変えつつ消滅へのプロセスを歩んでいるわけだが、それに対してフィンチは何らかの手を打たねばならないとは考えない。むしろ、そうした人間の側からの対抗策は無効だと言ってはばからない。

So man makes cosmetic changes on the shoreline, building dikes and sea walls, filling in swamps and marshes, dredging harbors and rechanneling streams. But the older, deeper currents continue to run in the daily tides, like the schools of alewives⁵

さらには、フィンチはこうした自然の力による破壊は人間の手によるそれと比べればはるかに「きれい」で「健康」であり、「一種の海浜都市再開発」でさえあると言う。

. . . the beaches were remarkably clean, a thousand times healthier than the lingering air of desolation and degradation that hangs over areas of human despoliation even before final abandonment and decay set in It reminded me of old construction sites cleared away before new building began, a kind of marine urban renewal.⁶

それだけではない。フィンチは先に名前を挙げたヘンリー・ベストンの『さいはての地の家』から引用しながら、破壊と創造が表裏一体の行為、同一の行為であることを強調する。

At the end of *The Outermost House*, Beston makes his famous statement, 'Creation is here and now.' Its converse, of course, is that destruction is also here and now, and this moment it seemed to be the stronger truth. But they are really two sides of the same coin, or rather, a single indistinguishable process that human beings have divided into 'creative' and 'destructive' force to express its effects on their own interests.⁷

あるいは、別の箇所では、高波による破壊の中に甘美な創造の香りまで嗅いでしまうのである。

The air itself was full of the mist of its destruction, intersecting rainbows and flashes of light, and it smelled sweet, new-made, and wonderfully exhilarating. In no other place I know can you get so close to ultimate, unbridled forces with so little risk as on the ocean shore.⁸

有り体に言えば、人間が「創造」のつもりで行っている行為であっても自然には「破壊」の行為と映るように、海による浸食にせよ嵐による破壊にせよ、人間の視点に立脚するからこそそれが「破壊」に映るだけで、自然の視点に立脚すれば、同じ営為は「創造」的行為に他ならない。フィンチは人間の「創造」の行為が自然を前にしたときいかに安手のものに過ぎないかを力説すると共に、自然の「破壊」行為と見えるものがいかに人間の都合

とは無縁な「創造的」行為であるかを執拗に語る。だから、フィンチはケープコッドが消滅の運命にあるという事実を甘受しながら、その一方で、「実際、ケープは肥大膨脹しているのである」という事実の方も強調せずにはいられない。いずれは死を迎えるかもしれない不定形で変幻自在な存在としてのケープコッドを創り上げる。

It is true that in the long run the Cape is losing ground, or at least attenuating, century by century. But along its edges, at least, the processes are not so simple. Average rates of erosion are just that, averages. Some beaches, especially at the extremes of the Outer Cape and along the Bay shores, are actually accreting and extending.⁹

かくして、フィンチはケープコッドの運命に関する暗い予言にもかかわらず、「無尽蔵な」「伸縮自在な」「創造的な」場としてのケープコッドを力説することになる。ケープは「肥大膨脹している」と言い張ってやまない。「究極的な放逸な力」の場でありながら、同時に「素晴らしく心を沸き立たせる」場としてのケープコッドをフィンチはメアリー・ヒートン・ヴォースに倣って「人の手の下に身を潜めてはいるが、決して飼ひ慣らされることのない小さな野獣」（『潮風』『砂漠の小屋で過ごした夜』）と呼び、また、「巻きひげを解いたように海に向かって伸びる」（『大切な場所』『迷路の中へ』）ケープコッドの姿を思っているのである。無論、このように言い張り、呼ぶためには、「意識的な視点の変化、焦点の開放」（『迷路の中へ』）が要請されることは先に述べたとおりである。

（2）テリトリーの感覚

真崎義博氏はソロー『ウォールデン』の翻訳のあとがきをゲイリー・スナイダーからの次の引用で締めくくっている。

そこにどんな植物が生え、どんな動物が棲んでいるか、そうしたことを熟知した土地だけが、ぼくにとってぼくのテリトリーだと断言できる土地なのだ。¹⁰

フィンチの「場所の感覚」を論ずるためには、前章で見たようにケープコッドという「場所」を大づかみにするだけでは十分ではなく、是非とも彼の「テリトリーの感覚」とでも呼ぶべきものを確認しておく必要があるだろう。本章ではケープコッドという「土地」に「どんな植物が生え、どんな動物が棲んでいるか」フィンチはどのようにして「熟知」していったかを見てみよう。

「熟知」するためには、動植物をよく見なければならない。ところが、私たちは様々な動植物に囲まれて生活していながら、思いの外そうした観察をなおざりにしている。たと

えば、『潮風』の「ガの観察」では、私たちが案外と昆虫を見ていないという事実が指摘される。

We need to look more at insects, if only to recognize them for what they are. We avoid them so deliberately that I doubt if many adults could give a reasonably accurate, objective description of the commonest garden bugs we spend so much time trying to get rid of.¹¹

だが、昆虫の「正確で客観的な姿の描写」は思った以上に難しい。なぜか。

『大切な場所』の「ガラス戸を通して」では、赤アリと黒アリとの「戦争」が直視されている。生々しい「戦闘」の有り様を見つめ、その様を描写した後に、しかし、フィンチは次のようにつぶやかずにはいられない。すなわち、自分が行った描写は「昆虫社会の現実」ではなくて「人間の側からの類推」を露にしたものにすぎないのではないかと。

But these terms seem more revealing of human analogies than of the realities of insect societies, whose superficial similarities to our own only tease us into a recognition of much more profound differences.¹²

アリと人間との間の「表面的な類似性」はこうした人間の尺度が作り出した産物にすぎず、その背後には「はるかに深遠な差異」が存在するのではないかという思いに捕らわれる。こうした思いが募り、人間の尺度の使用を極端に控えようとするとうどうなるか。

No, these insects were still puzzles, red-and-black hieroglyphs of a summer saga, written in an ancient tongue I had neither the wit nor the perception to read.¹³

こうした昆虫でさえもが「謎」となり、「解説不能の象形文字」となる。人間の側からの読み込みをいっさい拒絶した存在、本来人間とは異質な存在としての昆虫の姿がクローズ・アップされる。そして、このことは前章でケープコッドが「未知なる生き物」として捉えられていたことと無縁ではない。この「土地」に棲む「謎」としての個々の動植物は総体としての「未知なる」ケープコッドを具現化しているように見える。しかし、このことは「見る」ことの敗北を意味しはしない。いわんや、「見る」ことの放棄を意味するものでもない。身の回りの土地や動植物を異質な存在として認識することは「見る」行為の第一歩であると同時に大きな成果に他ならず、人間の尺度を押しつけることによって人間の価値体系の中にそうした土地や動植物の存在意義を取り込んでしまうことに比べれば、はるか

に意味のある創造的な行為といえるからである。

だが、ケープコッドを見るとき視点の問題になり、「驚異と畏敬の念と新たなものの見方」(『潮風』『序文』)を獲得することで「破壊」を「創造」に、「浸食」を「膨脹」に読み換えることが可能であったように、ここでもフィンチはそうした「創造的な行為」の術を学ぶ必要が生じてくる。

案の定、『大切な場所』の冒頭、家の周囲を取り囲むオークの森を前にして、語り手は苛立っている。「1620年11月、プロヴィンスタウンで最初に陸地を発見したピューリタン」のような心境でいる。何とか森の「迷路」への「参入」を試みようとするのだが、どうしても「アウトサイダー」「侵入者」とならざるを得ない。キツネのように、ウサギのように「音を立てず、静かに、易々と迷路に入っていきたい」と望んでいるのに、それが果たせないでいるのである。次の二つの引用文はビルグリム・ファーザー以来のアメリカの歴史を「大きな道路と広々とした開墾地」「不思議の抹殺と空虚な企ての実行」という形で総括していると同時に、「戦い」ではなく「帰属」に憧れる語り手を、「伐採」が「参入」には繋がらないとの語り手の嘆きを通して、別の生き方の可能性が模索されている。

These creatures tease me with their unconscious competence, a sureness that implies not so much prowess as belonging, of knowing where and who they are, of being local inhabitants in a way I am not.¹⁴

There is no Gordian knot to cut here. Every part of the maze is a knot tied to every other part. To cut down the trees and scatter the animals, to make broad paths and wide clearings, is not to solve or enter the mystery, but to obliterate it and erect empty designs in its place. Such acts may give me passage and room to move about, but not entrance, and entrance is what I crave.¹⁵

語り手は「迷路」への「参入」を望み、そのための「入り口」を求めているのであるが、次にそうした「入り口」が何とか発見できた例とその顛末を『潮風』から二つ取り上げよう。いずれの場合も、「異質な存在」としての自然の認識が、ネガティブな意味ではなく、前者では「参入」のための糸口として、後者では「参入」の成果として、積極的な意味づけがなされている。初めの引用は「荒れ野の体験」と題された章からで、ここではありふれた近所の森が夜にはその野生をむき出しにして人に襲いかかり、人を道に迷わせることを知る。

What by day had been a route so familiar and benign that I had ceased to notice it, was

now all at once menacing and totally alien. Though I was certain I was less than a hundred feet from my house, I felt effectively marooned and blind. I suddenly realized that I did not know these woods at all. It was a face I had looked on for months and months, and yet because I had no cause to see it, I found I had not the crudest notion of its features.¹⁶

これまで森を見てはいなかったこと、道に迷って初めて森を森としてみる術を学んだことを告白したフィンチは、“Wilderness is where you find it, or perhaps where you lose yourself” という気の利いた警句でこの逸話を閉じるのだが、「道に迷えば、荒野はいつもそこに姿を現す」というこの警句には「自己を失って初めて自然が見える」との含意もあるはずで、その意味では「道に迷う」=「自己を失う」体験こそがそこに棲む動植物を「熟知」するための必要条件であることを示している。

もう一つ『潮風』から「道に迷った」例を挙げておこう。「ヤマシギの飛翔」と題された章がそれで、ようやくにして念願のヤマシギの飛翔を目にしたフィンチが日暮れに人家にたどり着くと、窓に映る人影が「恐ろしく不思議なまったく異質なものに感じられた」という体験を語っている。窓辺の人たちとは知り合いであり、友人ではないかと自分を説得しようとするが……

And yet, for that moment, because of a woodcock seen briefly at sunset on a windy ridge, I stood apart and unconnected with their lives. I was a deer staring in, my head turned, slightly curious, slightly wary, but ultimately unattached and passing on.¹⁷

ヤマシギを一瞬目にしたばかりに人間社会との絆を絶ちきられて、一頭のシカに変身したことを知るフィンチである。

森を熟知するには道に迷わねばならず、ヤマシギを目にしたからにはシカへの変身を迫られるとは何ともラディカルなフィンチの発想ではあるが、その言わんとするところは、前章と同様、「人間」という枠内に留まっていた自然は見えてはこない、「テリトリーの感覚」を獲得するためには一旦「自己を失う」必要がある、あるいは、獲得したからには自己はそうしたもののの中に融解してしまうということだろう。だから、フィンチにとっての「テリトリーの感覚」は決して周囲の動植物を人間の目から特定・規定することからは生まれてこない。むしろ、「道に迷うこと」が要請される。「テリトリー」とは様々な謎、未知なるものの存在の場として創り出されるべきものであり、そうした創出行為を忘れると、すぐにでも人間の中に取り込まれて姿を消してしまいかねない存在、人間の方が自己の存在を消して「参入」して初めて見えてくる存在、もしくは、「参入」したからには自己

の存在が保証されかねない存在として捉えられている。

「テリトリー」にまつわるフィンチの一番のパラドックスとは、「道に迷うこと」＝「自己を失うこと」がすなわち「創造的な行為」であるとしたことであろう。確かにこれはパラドシカルではあるが、“re-place” するための“de-place” であり、“re-place” することで何かが生まれてくるとするなら、そうした“de-place” の行為もまた「創造的」とするべきだというフィンチの主張であろう。

それでは、人間を環境の中に“re-place” すること、「人間の言葉」と昆虫の「太古の言葉」双方に適用可能な「より体系的な文法」(John Elder, *Imagining the Earth*) を求めることは可能だろうか。フィンチはそれをヘンリー・ベストンの『さいはての地の家』の中の一文に求め、「生命と時間の網の目に捕らえられた．．．．．生命の輝きと苦痛に囚われた同胞」という共通基盤ゆえに、平たく言えば、死を前提としながらも生存を続けている同じ生き物としての認識ゆえに、「鯨には生存の絶対的権利がある」と主張するのである(『潮風』『鯨のように』)。

If they <whales> deserve our admiration and respect, it is because, as Henry Beston put it, ‘They are other nations, caught with ourselves in the net of life and time, fellow prisoners of the splendour and travail of life.’¹⁸

(3) 「人間の感覚」

だから、ガの「無関心でいられる能力」に対する敬意(『潮風』『ガの観察』)、ヒルの「タペストリー模様の皮膚の美しさ」に対する賛辞(『大切な場所』『池畔での一日』)を私たちは忘れてはならない、とフィンチは言う。「究極の不可知の存在としての鯨」の死骸を見に浜辺を駆け下りること(『潮風』『鯨のように』)には大きな意味があるとも言う。そうした行為が私たちに「テリトリーの感覚」「場所の感覚」を植え付けてくれるばかりか、それらの感覚の帰結としての「自己の感覚」をももたらしてくれるからである。

ゲイリー・スナイダーは「テリトリーの感覚」を得るためには動植物を熟知することが不可欠だと言ったが、フィンチはそれをさらに敷衍して、人間が人間であるためにこそ、動植物との共生が不可欠なのだと言う。

We need plants, animals, weather, unfettered shores and unbroken woodland, not merely for a stable and healthy environment, but as an antidote to introversion, a preventive against human inbreeding To confine this world in zoos or in exclusively human terms does injustice not only to nature, but to ourselves as well.¹⁹

こうした「他者」としての生き物との「生き生きとした創造的な関係」が「内閉への矯正手段として、人間の同種繁殖を防ぐ手だてとして必要なのだ」(『潮風』『鯨のように』)という主張は、フィンチにとってのケープコッドが「自己発見の場」でもあったことを思い出させてくれる。「人間中心主義的な考え方」を排して道に迷うこと、自己を失うこと、すなわち、自己の相対化、人間の相対化という作業が人間が人間であるためには必要なのであり、自然の力に弄ばれる脆弱な存在でありながらなお存在し続ける存在として自己を確認すること、海中に没する運命を前提としながらも「未知なる生物」であり続けるケープコッドと自己を同一化させることが要請され、それこそがネイチャー・ライターたるロバート・フィンチの言う「場所の感覚」「人間の感覚」の謂いであり、それはまた、とりもなおさず、一人の作家であるロバート・フィンチが創出したこのうえなく豊穡な世界の現出とも言えるだろう。ただし、その文学世界は一見極めて楽観的なものに見えながら、その実、あくまでもそうした「場」の、または、そうした「存在」の消滅を見据えたものであることも忘れてはならないだろう。

だから、「持続可能な社会」の創出は必ずしもフィンチの文学世界の究極の目的ではないかもしれない。彼の創出する世界はもっと居直ったところで成立している世界であるように見える。もっとも、そうした社会の実現ということであれば、本論冒頭に紹介したウェンデル・ベリーの主張、すなわち、「問われるべき問題は、いかにして地球を気遣うかではなく、掛け替えのない地球上の多くの人類及び自然の隣人のそれぞれをいかに気遣うかということだ」という主張はフィンチの主張にも通じるだろう。声高に叫びこそしないけれども、『潮風』『日本語版序文』では「人間の魂を育んでくれる風景の力を破壊せずに、風景の中に人間の存在を組み込むこと」が「最も緊急を要する問題」だと言明しているフィンチだからである。

(本稿は1995年10月金沢大学で開催された日本英文学会中部支部大会でのシンポジウム「アメリカ文学とNature Writing」での発表に加筆訂正をおこなったものである。)

注

1. Scott Slovic ed., *Worldly Words: An Anthology of American Nature Writing* (Tokyo: Fumikura Press, 1995) 13.
2. Robert Finch ed., *A Place Apart: A Cape Cod Reader* (New York: W. W. Norton, 1993).
3. Robert Finch, *Common Ground: A Naturalist's Cape Cod* (New York: W. W. Norton, 1994) xi. なお、拙訳(松柏社、1995年)でのタイトルを『ケープコッドの潮風』としたので、今回もそれに従った。
4. Robert Finch, *Cape Cod: Its Natural and Cultural History* (Washington, D. C.: U. S. Department of the Interior) 41.
5. Finch, *Common Ground*, 110.
6. Finch, *Common Ground*, 107.
7. Finch, *Common Ground*, 107.
8. Robert Finch, *The Cape Itself* (New York: W. W. Norton, 1991) 32.
9. Finch, *Common Ground*, 109.

10. 『森の生活』(JICC出版局、1989年) 399.
11. Finch, *Common Ground*, 92.
12. Robert Finch, *The Primal Place* (New York: W. W. Norton, 1983) 23.
13. Finch, *The Primal Place*, 23.
14. Finch, *The Primal Place*, 9.
15. Finch, *The Primal Place*, 9.
16. Finch, *Common Ground*, 18-9.
17. Finch, *Common Ground*, 54.
18. Finch, *Common Ground*, 102.
19. Finch, *Common Ground*, 103.